

ゆるキャン イチャラブ

芳川見浪

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なでしこと彼氏のイチャラブキャンプ
リンと彼氏のイチャラブキャンプ

千明は最近後輩の男の子が気になるようで
そういうコンセプトの一話完結短編

Twitterでそういうネタを話した勢いで書きました
気が向いたら他のキャラでもやってみたいと思う

目

次

なでしこの場合

リンの場合

千明の場合

8 4 1

なでしこの場合

今日は久しぶりに彼氏と2人キャンプです。付き合い始めてから2年、いや3年だったかな……彼に聞いてみたら5年でした。月日が経つのは早いなあ。

最初は元野クルの皆やリンちゃんを誘おうとしてたんだけど、アキちゃんが「おいおい、たまには彼氏と行ってやれよ」と言つてくれたのでお言葉に甘えました。

「こうやって2人つきりでキャンプするの久しぶりだねえ」

自然と笑みが零れました。彼はペグを打ちながら冷静に答えます。

「そうだなあ、1年ぶりくらいか……ペグ終わつたぞ」

「もうそんな前かあ、お互い歳をとりましたのう爺さんや」

「悪いが俺はまだピチピチ20代だぜ婆さんや」

「歳をとったの私だけ!?」

フランプを巻いて設営完了。今度はご飯を作ります。

なんと今日は一個500円もするカツブ麺、豪華な食事でワクワクだよ。

「あつ、味噌汁持ってきたけど飲むか?」

そう言つて彼は味噌汁が入った水筒を掲げました。その時私は目をキラキラとさせて「わーい、飲む飲むう」と子供みたいにはしゃぎました。

彼の味噌汁はとても美味しいのです。毎朝作つて欲しいくらい。

「ねえさつきの話だけどさ」

「お?」

「あのね、シワシワのおばあちゃんになつても好きでいてくれるかなあ?」

味噌汁を啜りながら、やや上目遣いで言いました。内心ドキドキしながらおそるおそるです。

何でこんな事聞いてしまつたのだろうか、凄く恥ずかしくなつてきた。

彼は少しだけ考える素振りを見せてから、こう答えました。

「好きじやないかなあ」

「あつ、そ…う…なんだ」

きつと今の私は泣きそうな顔をしているに違いありません。だつてこんなにも悲しくて辛くて引き裂かれそุดから。

「好きじやなくて愛してるだよ、昔も今も、多分この先も…それじや駄目かな?」

「ううん、駄目じやないよ!」

下げる上げるとは中々やつてくれます。私は嬉しくて嬉しくて、思わず隣の彼を抱き

しめてしまいました。勢いあまつて倒れてしまつたのはお約束です。

「ああ……一つ悲しいお知らせがあるんだけど」

地面で抱き合つたまま彼は私の耳元でそう呟きました。

「なに? もしかして雨具忘れた?」

明日の朝は雨が降るかもしけないつて天気予報で言つてました。

「いや、そうじやなくて」

彼は私をゆつくり剥がして（もう少し抱き合つたままでいたかつた）から、テーブルを指差しました。

「今のでカップ麺が下に落ちてしまつた」

「Oh」

殺人現場……もとい殺カップ麺現場がそこになりました。無惨にも中身をぶちまけられ、最早食べられそうにありません。一体誰がこんな残酷な事をしたのでしょうか、私はです。

「バ、バめんなさい」

リンの場合

静かな湖畔、街の灯りもとどかない辺境にあるキャンプ場にきた。時節は冬、雪が降り積もったキャンプ場はとても綺麗だ。

流石にテントを張るのは辛かつたので今回はキャンピングカーを乗り入れてのキャンプである。

テントを張る手間が無い分、晩御飯は腕によりをかけて豪華なのを作つてみた。

「リンの手料理か」

そう言つたのは今回一緒にキャンプをする私の恋人だ、口にすると恥ずかしいな。キャンピングカーも彼の物。

出会いはなんて事ない、たまたまキャンプ場で一緒にになる事が多く、何となく顔を知つてる状態で話してみたら意外と話が合つた。それだけだ。

告白もしていない、いつの間にか一緒に居て、いつの間にか恋人になつてた。

「見ておるがいい、三ツ星シェフリンの腕前を」

私は慣れた手つきでお湯を沸かし、慣れたてつきでレトルトパウチを投入し、慣れた

てつきで持つてきたご飯に盛り付けた。
カレーを。

「三ツ星シェフの腕前はどうした」

「フツフツフ、まだまだ甘いな。そのレトルトの袋を見るがいい」

彼は言われた通りにレトルトの袋を見る。そこには大きく「三ツ星シェフが選ぶ力
レー」と書かれていた。

「ここにいたのか三ツ星シェフ」

「更に愛も込めた」

「辛いな、リンの愛」

カレーだからな。

それにしても雪の湖畔は綺麗だ。冷たく澄んだ空気は喉に痛いが、どこか清涼で夜空
を明るく見せてくれている。湖は淀みがなく夜空を映し幻想的な風景を醸し出してい
た。

「これは凄い」

私はスマホで撮れるだけ湖畔の風景を撮つていく、ここは電波が通らないから後で皆
に見せてあげよう。

夢中になつて写真を撮つていると、不意に彼がコートを被せてくれた。

「もう少し厚着しとけ」

「うん、ありがと」

こういうのをさらつとやつてのけるのは卑怯だと思う。

普段は無愛想で口数も少ない彼だが、根っこはとても優しくて気遣いの上手い男性だ。料理がてんでダメなのが欠点だが、そこが可愛いとも思う。口が裂けても絶対言わないけどね。

一通り撮れたら焚き火へ戻る。焚き火の熱が冷えた私の心を暖めてくれる。

「ほおお、やはり焚き火はいいものですな」

「そうだな」

肌が乾燥してしまるのはいただけないが。

「なあリン、俺達つていつの間にか付き合つてたよな」

「うん、いつからつて聞かれたら困るぐらい」

「これからもいつの間にかが続くのだろうな」

「そうかもね」

でもそれはとても素敵な事だと思う。彼が何を言いたいのかはわからないが、きっとこれからもいつの間にか彼と進展しているのだろう。

「あのさ、いつの間にかプロポーズしてたら、受けてくれるか？」
「は？」

何を言つている。

いやいや待て待て、それはどういう意味……今取り出したその箱は何だ。指輪じゃないか。

えつ、待つてもしかしてもしかしなくてもそういう事なのか？

「えつ……あつ、えと。うん」

戸惑い、頭が混乱していたけど。でもこうやつて頷く事だけははつきり知覚していた。

私は冷めた人間かと思つていたが、こうやつて好きな人からプロポーズされたら嬉しさで我を失うくらいに情愛を持つていたらしい。

「よかつた、断られたらどうしようかと思つてた」

「自分でもビックリするぐらい嬉しい」

「そうか、じゃあ早速リンのお父さんに報告しないと」

「え？ もう？」

「ああ、既にリンのお父さんにはプロポーズをするつて伝えてあるからな」
聞いてないぞ。

千明の場合

あたしの名前は大垣千明、天下御免の……えっと、何か凄い女だ。いずれはキャンパーとして世界を征服してみせる！

その時を楽しみにしてるがいい！ フーサツハツハ。

「あの、大垣先輩？ そこで変なポーズ取つてたら棚卸し出来ないんですけど」

あたしの偉大なポーズに見惚れたあまり、つい照れ隠しでそのような事を言うとは可愛いヤツめ。

この男はあたしのバイト先の後輩だ、先輩であるあたしが何かとお世話してやつてีる可愛い可愛い後輩なのだ。

「店長～、大垣先輩がまたサボつてます」

「わあ～！ 待て待て！ 棚卸しな！ あたしが替りにやるから！」

「あ、はい。お願ひします」

あたしは後輩から棚卸しのシートを奪うように取り上げ、キヨロキヨロと周りを見渡して店長を探す。こないだ店長に怒られたのがトラウマになつてて。
「あれ？ 店長は？」

「いませんよ」

「…………たばかつたな貴様ア！」

別の日。

「何で僕が荷物持ちを」

「こないだあたしを騙した罰だつて、それにこんな美少女とお買い物デートなんて役得だろう？」

「確かに先輩は可愛いですし、美少女と言つても過言じやないですけど。だからといってこの荷物は多すぎですって」

後輩の両手には食材がパンパンに詰まつたお買い物籠があり、更にリュックサックには新調したキャンプ道具も詰まつている。

あたしは勿論手ブラだ。エツチな方の意味じやないぞ。

ただその時のことあたしは荷物よりも後輩の言葉で動搖してしまつた。さらつと言つてのけたが、こいつはさつきあたしの事を美少女だと言つたのだ。あまりの不意打ちで顔が逆上せそうな程熱くなつてるし、胸もめつちやくちやドキドキしてる。
少なくとも今は後輩の方を向くことはできないな。

「お、おう。まあこれもほら、あれだ……男の子の特権てやつだ」

「はいはい」

またまた別の日。

あれ以来妙に意識してしまつて後輩の顔をまともに見れない日が続いたが、まあ何とか最近は持ち直した。

「おっしゃ！ 今日はバイトだ」

今日は後輩と同じシフトだつたな。

いつもと同じ道を通つて酒屋に向かつてゐる所、思いがけない場面に出会つた。

「あおいと後輩？」

通り過ぎた喫茶店、そこに大親友的ムーブのあおいと後輩がいたのだ。向かい合つて楽しげに談笑している。いつの間に知り合つたんだよと思つたが、心当たりが多すぎたのでとりあえず割愛。

問題は二人がめちゃくちゃ笑顔つてところで、ぐぬぬ、あおいめ、あたし以外の男の前であんなに笑うなんて。

とても不愉快なので颶爽と駆け抜けてやつた。

その時あたしはあおいにむけて冗談混じりに嫉妬心を向けたが、後になつてどこか違和感をおぼえるようになつてしまつた、ほんとにあたしはあおいに嫉妬していたのか

更に別の日。

あの日を境に後輩の顔をみると何故かイライラするようになってしまった。
だつてそだろ、こいつこんな間抜けな顔して裏ではあおいと密会してゐんだぞ、許
せるか？　いや許せないね、ほんと……なんで許せないんだろうな。
とまあそんな感じでモンモンとしてたんだが、どうも解決しそうにない。そうしたら
早くもバイトが終わつて一日が終わりそうになつてゐる。

「おつかれーす」

早々に帰ろう。

この辺は明かりが少ないから少し怖いんだよな。

「あの！　先輩、待つて」

はてさて、何やらあたしを呼ぶ声がするぞ。振り返ると思わず「ゲツ」と言つてしまつ
た。

後輩だつたのだ。

まいつたな、今はあまり会いたくないのだが。しかもそんなあたしの気持ちには気付
かずのうのうと話しかけてきて、腹たつてきたな。

「なんだー後輩？」

少し棘があるのは致し方ない。

「あの、大垣先輩つて明日誕生日ですよね？」

「おう」

「まだ早いですけど、これ誕生日プレゼントです」

後輩は照れ臭そうに大きな紙袋を差し出した。

差し出されるまま受け取り、中を見ると、そこにはコンパクトチエアと火吹き竹が入っていた。

どちらもキャンプ道具としてはあると嬉しい物で、そしてどちらも欲しかった物だ。

「大垣先輩が喜びそうなのわかんなくて、犬山先輩に聞いたんですけど、えと、気に入らなければ捨ててもらつても」

あたしがぼおと見てるからか、後輩が突然自信無さげに話し始めた。

はつきり言うとめちゃくちゃ嬉しい、この場で叫びたくなるぐらいだ。それにあの日あおいと出会っていたのはこのためと知つてあたしは心の底から安心したんだ。

「いや、すっげえ嬉しい。ありがとな」

自然と口許が緩んでいた。後輩もそれを聞いて安堵したのか、柔らかく微笑んだ。

その笑顔を見た途端あたしの心臓は跳ねるように脈打ち始め、奥底に秘めていた感情

を呼び起こした。

なんて事ない、あたしは後輩に恋をしていたんだ。いつからかはわかんねえけどそういう事だ。

「あのさ後輩」

「はい」

この気持ちを伝えたい。あたしは心の勢いに身を任せるまま舌と唇を動かし、そして

……。